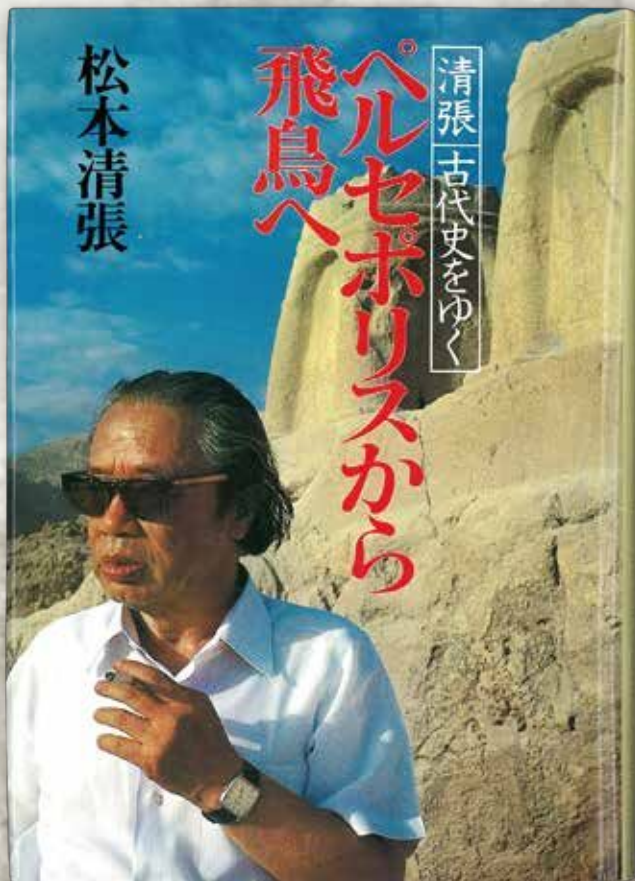


松本清張記念館

◆館報◆

2023.1
第70号

いまは、それよりも馬子の嶋邸にあったと推測したほうが理に合って自然と思うので、この新考に訂正する。



『火の路』で、斉明天皇の建造される両槻宮にこれらの石造物が付属物の予定で造られた(中略)と作中の人物に語らせたことがある。

ふたつきのみや

『ペルセポリスから飛鳥へ』

昭和54(1979)年 書き下ろし 日本放送出版協会

現在入手しやすい本 『松本清張全集55』

書影の写真(小野成視撮影)

目次

松本清張記念館開館24周年記念講演会	2
松本清張没後30年記念 共同企画展示	6
展示品紹介	7
友の会活動報告	7
トビックス	8

作品紹介

古希(数えて七〇歳の年、松本清張はNHK『清張古代史をゆく』の取材班に同行し、イラン各地の古代遺跡を巡った。

ササン朝ペルシャから中国の唐を経て、正倉院に入った瑠璃碗の源流の地、ハリメジャンで、東京大学イラク・イラン遺跡調査隊の発掘現場を見学し、地下式横穴墓の盗掘の実演に立ち会っている。(旅の章Ⅰ)

イラン南部のナクシュ・イルスタムでは、二基の石造物を見て、ゾロアスター教の拝火壇ではなく「祭壇」だと推定し、バサルガダエでは拝火壇の基壇を観察している。イエズドでは、拝火儀式を見学し鳥葬の「沈黙の塔」を見学した。(旅の章Ⅱ)

考察の章で、清張は古代イランの遺跡や遺物と飛鳥地方のそれとを比較考証して、『火の路』(昭和48・6・16)49・10・13『朝日新聞』での推論を、さらに推し進めた。

男女石人像や橋寺二面石とペルセポリス宮殿跡の一洞双顔の柱頭飾り、猿石とイランの男根を出した人物テラコッタなど種々比較されているが、法隆寺金堂釈迦三尊像天蓋とトリビュロンの天蓋の飾りなどの共通性や、鼻高の人頭石とイラン人の顔つき、猿石の屈む姿勢と崖浮彫り「アルデシル一世の騎馬叙任」(三世紀)中の馬蹄下の悪霊の姿勢の類似性などは、傾聴に値する。

また猿石、須弥山石、石人男女像などは蘇我馬子の嶋宮の池畔に飾りとして置かれたとの推定は、蘇我氏の開明的な性格や渡来人との関係の深さに着目すれば、斉明天皇の施設の付属物とする(『火の路』)より理解しやすい。酒船石や益田の岩船(水の神アナーヒターに捧げる祭壇)の解釈も深まっている。

満七〇歳になる年の五月、本書は書き下ろし出版された。
(学芸担当主任 中川里志)

松本清張記念館開館24周年記念講演会

「生命を捉えなおす」動的平衡の視点から

講師 生物学者 青山学院大学教授 福岡 伸一

令和4年8月21日(日) 午後3時
男女共同参画センター・ムーブ
参加者350名

◆松本清張のすばらしさ



皆さんどうもこんにちは。福岡伸一と申します。今日は、皆さんとお話する機会をいただきまして、大変ありがとうございます。松本清張記念館主催の講演会ということで、大変光栄に存じております。1人の文豪の立派な記念館、その中には、清張先生の家が丸ごと入っている。そんな素敵なミュージアムも他に

ないと思います。

私にとって、松本清張というのは「知の巨人」であり、ずっと愛読してきました。私は昭和のど真ん中に生まれて、小・中学校、高校と昭和40年代、50年代を過ごしました。ですから、松本清張ブームでもあったわけです。その後、ずっと読み続けて、大体、主要作品は読んだと思います。『点と線』とか、『砂の器』とか、『Dの複合』とかです。清張作品は、とにかくこのタイトルがかっこよくて、読まずにはいられないところがあります。それから文学というのは、作家本人が亡くなってしまおうと読まれなくなってしまう人が多いですが、死後もずっと読み継がれていて、かつ、ドラマ化されたり、いまだにいろんな人に読み継がれたりしているのは、松本清張は本当の文豪だったからだと思います。三島由紀夫は松本清張のことを文体がない、だから文学じゃないと言ったらしいですが、そんなこ

とはなと思うんですね。松本清張の小説には、確かに三島由紀夫みたいな華麗な文体はないけど、淡々とした記述の中に、常に一貫して、追い続けたものがあると思います。それは、事件のトリックとか、時刻表の隙間とか、そういった技巧なことではなくて、松本清張がずっと探求したのは、人間が罪を犯してしまう時の動機がどこにあるかということだと思います。その動機というのは、嫉妬心や復讐心であるとか、裏切りに対する報復であるとか、人間が普遍的に持っているものに接近していくところに、松本清張のすばらしさというか、解析力の深さがあると思います。私の一番好きな作品は、『石の骨』という短編で、日本の縄文・弥生時代より、もっと昔に日本列島に存在していたと思われる明石原人の骨の化石を発見した田野研究者、アマチュアの研究者の物語です。その彼は、これが原人の骨だと信じて、大学の偉い先生や学会にアピールしようとするけど、エリート研究者ではないので、冷たくあしらわれてしまいます。そこで、何くそと思うって、何とか戦いを挑むという物語です。ここにも、人間の動機というものが色濃く投影されていると思います。

◆私にとっての研究の動機—センス・オブ・ワンダー

私にとって、研究の動機というのは、少年時代に出会った自然の美しさ、或いは精妙さ、驚きです。センス・オブ・ワンダーという言葉もあります。これはレイチェル・カーソンというアメリカの女性環境学者で、『沈黙の春』を書いた人が言った言葉です。少年少女なら誰でもが、自然に持っているそういう心が、その人の出発点になっているという言葉です。私にとってのセンス・オブ・ワンダーは、ルリボシカミキリという小さなカミキリ虫の鮮やかすぎる青です。フェルメールですら出せないような素敵な青色をしています。こんな青い虫がこの世界に存在しているということに触れて、「一体生命ってというのは何だろう」と思ったのが私の原点で、いまだにそれを問い続けながら研究を進めているわけです。それから、もう一つの私のセンス・オブ・ワンダーは、生命の変化

ということですね。

私の小学校時代の夏の自由研究は、蝶々の観察日記でした。みかんの葉っぱとかを調べると、必ず小さなアゲハ蝶の卵が産み付けられていて、それを取って育てていくと、幼虫はだんだん脱皮しながら大きくなって、ある日、急にサナギに変わって動かなくなってしまうわけです。そのサナギの中では、幼虫は一旦、全部どろどろに溶けてしまいますが、2週間ぐらいすると、その液体の中から蝶々の細胞が幼虫とは似てもつかない綺麗な羽根を持ったアゲハ蝶に変身して、羽を伸ばして空中に飛んでいく。こんな劇的な変化はないわけです。ここにも生命の不思議さ、精妙さというものがある。これを一生懸命観察して、記録をとっていたわけです。ですから、私はあんまり人間の友達がなくて、虫が友達だったわけです。

そんな少年を見て、両親が心配したのか、ある時、顕微鏡を買ってくれました。どうして友達がいない少年に顕微鏡を買ってくれたのかというと、多分、顕微鏡をネタにして友達を呼んできて、みんなで見たら、自慢したりして、もっとコミュニケーションしなさいという親心だったと思うんです。私は早速、大好きな蝶々の羽根を調べてみました。蝶々の羽を見ると、色鮮やかな赤や黄色、黒とかの色がついていて、ミクロな目で見ると、鱗粉というモザイクタイルみたいなものが一枚一枚敷き詰められて文様が作られています。レンズの底に小宇宙が広がっているみたいな、非常に素敵なセンス・オブ・ワンダーの体験で、私はそのままレンズに吸い込まれてしまっただけで、ますます友達なんかいらなくなりました。そういう少年時代を過ごしました。まだオタクという言葉はなかったけど、紛れもなく私は虫オタクだったわけです。そのあと顕微鏡オタクになりました。何か一つ好きなことがあると、その好きをずっと追求して、源流を辿りたくなってしまうのがオタクの心です。

◆顕微鏡の源流を辿って—レーウェンフックとの出会い

私は、この顕微鏡という素敵な装置を一体いつ、どこの誰がつくり出したのかという源流を辿りたくなっていました。顕微鏡の歴史をたどっていくと、オランダのデルフトという小さな町が顕微鏡の発祥の地であることを知りました。今から350年も前の17世紀に、アントニ・レーウェンフックさんという人がいました。この人は学者ではありません。普通の町の毛織物商の息子として生まれ、アマチュアの科学好きとして、自分で顕微鏡をつくり出してしまったんです。その顕微鏡は、自己流で作った顕

微鏡なので、原始的な形をしています。レンズの解像度がすごく良くて、大体300倍ぐらいの倍率を出すことができていました。これは、現在、私たちが研究で使っている顕微鏡とはほぼ同じ倍率です。彼は、アマチュアの研究者でしたから、何か系統だって研究するのではなくて、手当たり次第に自分の興味の赴くままに、いろんなものを見ていました。最初は運河の水を見て、いろんな形をした微生物を発見しました。肉眼では見えないけど、この世界に生命体が満ち溢れているということに、最初に彼は気が付いたわけです。彼は、非常に丹念に自分のノートを作って、それを記録していました。そのノートが現在に伝わって、レーウエンフックという人がいて、その人が何をしていたかが残っているわけです。ですから、この書いた記録はすごく大事なわけですね。

彼は、その後、赤血球や白血球の発見、細胞の発見、精子の発見という生物学史上に残る大発見を次々としたということを知って、彼は私のヒーローになりました。こんな人になりたいなと思って、私も研究する人生、生物学者の道を目指して勉強することになりました。

この探究をしたのは、顕微鏡に夢中になっていた小学校5年生ぐらいのことだったと思います。その時、一つ面白い事実が付きましました。それは、このデルフトという町に、ほぼ同じ時に生まれた少年がもう1人いました。それは、今では世界中に愛好者がいるヨハネス・フェルメールさんです。でも当時、私は虫や顕微鏡に夢中だったので、フェルメールのことは、すっかり忘れてしまつて、再会するのはずっと後になってからのことです。

◆分子生物学者の生命の見方

基本的に生物学を含む科学の世界は、宇宙のあり方を絶えず細かく調べていって、どんどんどんどんミクロの世界に入っていくって、探究を進めてきたわけです。

我々の体も細胞からできている。細胞の中には、タンパク質がいっぱい存在していて、そのタンパク質は、DNAという糸に書かれている遺伝暗号をもとに作られている。その暗号を解くと、この細胞の中で使われている部品が何種類あって、どんなものであるかもわかる。それが、2003年ぐらいに、ヒトゲノム計画というもの完成して、全部の遺伝暗号を解読し尽くしてしまいました。その結果、DNAの中には、細胞によって、使われている部品は違うけど、全ての部品を集めると2万1千種類ぐらいの部品から細胞が成り立っているということが分かったわけです。私たち分子生物学者は、この細胞をコンピューターの基盤のようにミクロな

部品が並んでいて、それが機械仕掛けで生命現象を引き起こしていると考えています。こういう生命の見方を機械論的な生命の見方ということになります。よく、癌のメカニズムみたいな言い方がありますが、メカニズムという言葉の「メカ」とは機械という意味で、生命を機械のアナロジーとして考えているわけです。常にミクロなレベルで生命を分解していったって、要素還元主義的な考え方によって生命現象を解析してきたということになります。21世紀の現在は、まさにこの要素還元主義の究極的な行き着く先として、全ての遺伝子が解明され、その遺伝子の異常によって病気が引き起こされ、それを何とか遺伝子の暗号を書きかえれば治るのではと考えて、DNAの科学が進んできているわけです。そのことによって分かったことは沢山あります。

ただ、生命を機械論的に見すぎると、メカニズムとして考えすぎると、要素還元主義的にだけ生命を見てしまうと、生命が持っている非常に大事な側面を見失ってしまうということに、私は気が付いたわけです。その機械論的に傾き過ぎた生命感を捉えなおさなければいけないという考え方に行き着いたわけです。そのプロセスをぜひ皆さんにお話したいと思っています。

◆生命を捉えなおす―動的平衡の視点から

機械論的に生命を考える時に、大事なものは遺伝子を突き止めてくるといことです。そして、その遺伝子を探し出して、その遺伝子が何をしているかを調べるのが、分子生物学の方法論です。

私は、大発見をしたわけではないけど、いくつか小発見をしました。それは新しい遺伝子を見つけてきたということです。私が見つけた遺伝子は、GP2と名前をつけた遺伝子でした。GP2とは、グリコプロテイン2型の略で、グリコプロテインは、糖タンパク質と訳されます。GP2遺伝子は、GP2タンパク質の設計図です。このGP2が何をしているかを調べようと研究していったわけです。この時、私は非常に機械論的な方法で、このGP2の役割を調べようとしました。

それは、実験動物のマウスを使って研究をします。このマウスは、ただのマウスではなくて、GP2遺伝子ノックアウトマウスという特別な遺伝子操作を施されたマウスです。どういうことかというと、細胞の中の細胞核から、ミクロな外科手術によって、GP2遺伝子を捨ててしまい、その細胞から受精卵を作って1匹のマウスに育てます。そうすると、体のすべての細胞からGP2遺伝子が捨てられてしまったマウスになります。それをノックアウトマ

ウスと呼んでいるわけです。

生命は機械のアナロジーとして考えることができるので、部品を一つ取り外してしまつと、当然その機械は壊れるわけです。ピンセットで部品を一つ抜いて捨てたら何か異常が起きますよね。その異常を調べることによって、その部品が何をしているかを調べようというのが、このノックアウトマウスの実験です。ですから、GP2を捨ててしまった後で、もしこのマウスが癌になればそれはGP2がないから癌になっているわけですね。ということは、GP2は癌にしないようにしてくれている。そういうメカニズムに関係していることがわかるようになります。ということと、このマウスに一体どんな異常が起るかを調べることによって、GP2の役割を非常に明確に言い当てようというのが、この研究だったわけです。このノックアウトマウスを作るのはなかなか大変で、3年ぐらいの月日がかかります。私は、もう寝食を忘れて、一生懸命、研究に没頭しました。また、研究費がすごくかかります。このマウスの小さな背中には、実は、ボルシェの新車だったら3台ぐらい買えるほどの研究費が乗っかっているわけです。私は東奔西走して研究費をかき集めて、とうとうこのGP2遺伝子ノックアウトマウスをつくり出しました。このマウスは、無事生まれてきて、成長していきましました。どんな異常が起るのか固唾をのんで見守っていたわけです。ところが、マウスは、どこにも異常が見当たらない。いやそんなはずは絶対ない。だって、GP2は確かにない。ひょっとすると、異常は、時間をかけて現れるかもしれない。ところが、マウスは年をとっても異常が現れませんでした。

GP2という大事な遺伝子のはずが、無くても何も起こらないという大変な現実の前に私は立たされたわけです。これは、なかなか研究者にとっては厳しい状況で、多大な研究費と時間をかけてマウスをつくり出したのに、何も結果が出てないということです。そこで私は非常に悩んで、この問題をどう考えたいのか思い詰めたわけです。生命を機械と考えるから一つ部品がなければ機械は壊れる。その壊れ方によって部品の役割を調べる。そもそもこの考え方がおかしいんじゃないか。部品が一つなくてもないなりに何とかやり過ごせるのが生命なんじゃないか。そのように、自分の中で生命に対する見方をあれこれ反省していた時に、私はふと、昔の人が言った言葉のある論文で読んだことを思い出しました。

論文には、「生命は機械ではない、生命は流れだ」と書いていました。これを言ったのは、ルドルフ・シェーンハイマーさんという人です。彼は、その後、私の新しいヒーローになったわけですが、一般

的には、今や完全に忘れ去られてしまった科学者です。でも、彼が行った研究にもう一度光を当てることによって、機械論的な見方に傾き過ぎた生命感を提えなおし、もう一度、生命というものを考えなおすきっかけになるのではないかと、私はだんだん思うようになりました。それが動的平衡の生命論に繋がっていくわけですが、まずは、彼は、何をどう研究することによって、生命は流れだと言ったのかお話しします。

シェーンハイマーの問いは「生命とは何か」という生物学者なら誰もが問うことだったわけですが、この問いを更に身近な生命現象に置き換えて、彼は問いを立てました。それは、生きていくためには、動物は必ず食べ物を食べ続けなければならないわけですね。どうして食べ物を食べ続けなければ生きていけないのか。

これは、皆さん簡単に、「それはエネルギーがいるからだよ」と答えると思います。彼が生きた100年近く前にも、生物学は既に機械論的な見方が主流になっていて、生命現象のあらゆることを機械のアナロジーで考えるようになっていました。食べ物と生物の関係は、ちょうどガソリンと自動車の関係と同じだとみんな思っていたわけですね。自動車が動くためには、ガソリンが必要で、ガソリンは自動車のエンジンの中に入ると燃やされて、熱エネルギーになって、それが機械エネルギーに変換されて、エンジンが回って自動車は動くわけですね。それと同じように、生物が食べ物を食べると、燃やされて、それが熱エネルギーになって体温になり、運動エネルギーになって体を動かし、代謝のエネルギーになって細胞を働かせる。動いたり熱になったり、細胞を動かしたりすると、エネルギーが消費されてしまつて、最後は外界に捨てられてしまふわけですね。だから、またガソリンを満タンにしなければならぬのと同じように、新しいエネルギーが必要で、食べ続けるのが生命体だと、自動車のアナロジーとして、生命をみんな普通に捉えていたわけですね。彼は、そこに疑問を投げかけたわけですね。本当にそうだろうか。食べ物が入っていくと、本当にみんな燃やされて、エネルギーに変わって燃えカスは排泄されていくとしたら、インプットとアウトプットの収支がちゃんと合わないといけない、その収支をきちんと見極めたいと彼は考えたわけですね。

彼が研究していたのは、1930年代ですが、その頃には、機械論的な見方がかなり進んでいて、究極の目で見ると、生命体というのは細胞からできていて、細胞はタンパク質やDNAのような分子でできていて、分子というのは、酸素や炭素といった原子からできている。だから、生命体は、究極の目で見るとつぶつぶの集まりだということがわかっていました。食べ物の方も、これもまた究極

の目で見ると、つぶつぶの集まりなわけですね。だから、そのインとアウトを調べることによって、本当に、収支が合うかどうかを見極めることができますが、ここに一つ大きな難題があったわけですね。というのは、私たちの体、ねずみにしろ、人間にしろ、粒の集まり、食べ物も同じ粒の集まりなので、つぶつぶが、つぶつぶの中に入ってしまうと、どの粒がどこに行つたのか、たちまちわからなくなつてしまいます。だから、この収支を調べるためには、食べた粒の方に何らかの印をつけておかないと、体の粒とまじり合つて見えなくなつてしまふという問題があるわけですね。当時は、原子一粒ひとつぶに印を付けることは誰にもできないことだったわけですが、彼は、物理学で新しく分かつてきたことにヒントを得て原子に印をつけて、この収支の実験をしようと考えたわけですね。実験をしたところ、意外なことがわかりました。

それは、食べたものがどこに行くかを調べてみると、燃やされる部分も勿論ありましたが、半分以上は燃やされずに、ねずみの体中、尻尾の先や頭の中など、いろんなところに散らばつていつて、溶け込んで、ねずみの体の一部に成り代わつてしまつていました。それは、ガソリンを車に補給したら、ガソリンの成分が、タイヤの一部になったり、エンジンの一部になったり、ガラスの一部になったりしてしまうということです。それは自動車の中で起こらないことです。

シェーンハイマーは、この実験を非常に厳密に行つていて、実験をする前のねずみの体重を量っていました。少なくともこの食べ物の粒子が増えた分だけは体重が増えるはずなのに、ねずみの体重は、元のねずみの体重と1グラムも変わっていませんでした。一体なぜ、体重が変わらないのか。彼は、この実験を次のように解き明かしたわけですね。食べ物を食べるということは、ガソリンを補給しているのではなくて、自分自身の体を入れ替えているということなんです。私たちの体の中は、常に、分解と合成が起きていてグルグル回っているわけですね。その流れを止めないために、私たちは、食べ物を食べ続けているわけですね。実は、体の中のありとあらゆる部分が、どんどん壊されながらどんどんつくり変えられ、食べ物の成分と入れ替わっているのです。ですから、昨日の私と今日の私ではもうちよつと違う。数週間前の私と今日の私では、物質レベルではかなり入れ替わっている。数ヶ月もたつとこつそり入れ替わつていて、1年も経つと、1年前の私を構成していた物質は、現在、ほとんど残っていない。すつかり、その間に食べたものと入れ替わつていると言っても過言ではないわけですね。ですから、久しぶりであつた人に、「やや、どうもお久しぶりですね、全然お変わり



ありませんね」と言いますけど、それは生物学的には間違っています。1年も会ってないと、その人は別人になっていふと言つても過言ではないのです。ということで、実は、食べ物を食べるということは、エネルギーを補給しているのではなくて、自分自身をつくり変える行為だということをシェーンハイマーは明らかにしました。常に、食べた物は、私たちの体を一瞬つくりながらまた流れ出ていて、生命というのは流れであるとは、そういうことですね。生

きているというのは非常にダイナミックなことだと論文に書いているわけです。

このことから、生命とは、常に入れ替えながらダイナミックに変わりつつも、ねずみならねずみ、人間なら人間の形というある種のバランスを保っているわけです。そこで、私はこれを「動的平衡」と言っただけではないか、生きているとは動的平衡だと考えた方が、より生命のあり方に則した生命感をつくれるのではないかと、自分自身、パラダイムシフトをしたわけです。

そうすると皆さんはすぐに、どんどんどんどん自分自身入れ替わっているのにもかわからず、どうして記憶は保たれるのか、或いは、どうして自分は自分であるというアイデンティティが保たれるのかと不思議に思うと思います。また、どんどん更新されているにもかかわらず、ちよつとずつ老化してしまうのはどうしてなのかと思うと思います。これも動的平衡の観点から説明することができます。

まず、どうして平衡が保たれるのか。どうして記憶が保たれるのか。それは、単に入れ替わっているのではなく、ちゃんと相補性というものが保たれながら、入れ替わっているからです。それは、ジグソーパズルみたいなものだと思っただけであればいいのですが、細胞とは、前後左右、或いは斜めの細胞と互いに支え合いながら、互いに周囲の細胞を認識しながら生存しています。それを相補性、互いに他を補い合いながら、互いに他を支えているという言い方をします。例えば、パズルの真ん中のピースを捨てても、周りにはまるることができます。そうして相補性を保ちながら、私たちの体は同時多発的に入れ替わっています。脳細胞の配線も、この相補性によって大きく変わらないように、しかし、部分部分では更新されています。ですから、記憶は相補性が変わらなければ何とか保たれるし、自分の統一性は保たれる。そうして、私たちは、自分自身を更新しながらも、維持しているわけです。この動的平衡のポイント、は、作ることも壊すことを一生懸命していることです。大きく変わらないために、小さく変わり続けることで、分解と合成の絶え間のないバランスが保たれて、常にリニューアルされているわけです。だから、何かがなければならぬに、周りのものが補い合ったり、ピンチヒッターが出てきたりして、新しい動的平衡がつくりなおされて、我々は何とか生きているわけです。G P 2 がなければならぬに、新しい動的平衡がつくり出されてやっていけていたわけです。

どうしてこんなに一生懸命自分自身を壊しながらつくり変えているのかという、もう一つの大きな疑問があります。これはちょっと難しい言葉を使うと、この宇宙の大原則に、エントロピー増大の法則というものがありません。「エントロピー」というのは、「乱雑さ」という言葉で訳されます。世界はこの乱雑さが増加する方向にしか動かない。どういうことかという、整理整頓しておいた机の上もすぐに書類が溜まったりして乱雑さが増していってしまふ。或いは、ピカピカのピラミッドやタワマンも時間が経つとだんだん風化して傷みが増えてくる。熱いコーヒーもちよつと目を離している隙にぬるくなってしまうし、熱烈な恋愛も冷めるのはすべてエントロピー増大の法則がこの宇宙を支配していて、秩序がない方向に動かそうとしているからです。生命はそれに対抗して、何とか秩序を保とうとしているわけです。その方法は、頑丈につくるのではなくて、むしろ自分自身をゆるゆるやわやわにつくっておいて、常にエントロピー増大の法則に先回りして自分自身を壊しながら、つくり変えるという方法を選ぶことによって、何とか対抗しているわけです。でも、これは宇宙の大原則なので、どうしても打ち勝つことができません。何とか抵抗することはできても、徐々に後退していつてしまいます。老廃物はちよつとずつ溜まっていくし、細胞膜もちよつとずつ酸化していって全部を更新することはできないわけです。これが老化ということです。

しかし、生命は、有限の時間を生きて、健気に動的平衡の力によって対抗しつつ、38億年という長い時間、連綿と進化をしながら、今日まで続いてきているわけです。そういう面では、動的平衡というの、非常に巧みな方法によって、生命をバトンタッチし続けてきたということになります。生命をどう捉えるか。私は、分子生物学をずっとずっと追究した挙げ句に動的平衡の生命感というものに気が付いたということです。

◆フェルメール作品との出会い

私がニューヨークにあるロックフェラー大学でボスドクというトレーニング期間を過ごさなければいけなかった時、ちよつと1980年代の後半から90年代にかけてでした。街中にフリックコレクション美術館があることを知り、このコレクションで初めて本物のフェルメール作品を見ることになりました。フェルメールは43歳の短い人生で、わずかな絵しか描けなかったわけです。現在、37作品しか残っていません。この37という数を聞くと、またオタク心は、びびつときちやうわけです。なぜかという、37が素

数だからです。素数というのは、その数と、1でしか割れない孤独なナンバーです。もうこれはコンプリートするしかないと考えて、世界中に散らばっている作品を全部見てみようと思いいったわけです。

それで思い出したのは、私がニューヨークで、孤独な生活をしてる時に、すごく日本語の書物に飢餓感があったわけです。日本人仲間から回ってきた雑誌に「文藝春秋」「週刊文春」がありました。「週刊文春」には、松本清張の「神々の乱心」という連載遺作が掲載されていました。途中で絶筆になってしまいましたが、非常に不思議な皇室の内部と新興宗教の闇が描かれた作品で、アメリカにいるのにすごく日本的な物語に心を惹かれて、一生懸命それを読んできました。また、「文藝春秋」には、短編が時々掲載されていました。それは後に、「草の径」という最後の短編集になっていて、そこには、松本清張の原点に繋がるような人間の動機に関わる非常に面白い短編が収録されていて、それも夢中になって読みました。ですから、私の松本清張体験というのは、アメリカにいる時、ちよつと松本清張さんが亡くなる前後だったので、その最後の作品にもう一度、目を見開かされたということがあります。

全部のフェルメール作品を見ると、また新しいオタクマインドが湧き上がってきて、37作品を1ヶ所に集めたらどんなにすばらしいだろうと。全フェルメール展であります。それは絶対に不可能なんです。門外不出の作品もあるし、個人が持っている作品もあるんです。そこで考え出した屁理屈が、オリジナルのデジタルデータを借りてきて、或いは購入して、それを加工して、本物以上に本物に近い偽物のフェルメールを作って、それを一堂に集めるというリクリエイト・フェルメール展です。今から10年ぐらい前に銀座で開催しました。こんなことをしていたら、ニューヨークタイムズが、私を取り上げてくれました。フェルメールオタクとして有名になってしまったんです。そしたら、ニューヨークタイムズを見た「青いターバン」の女（真珠の耳飾りの少女）という作品を持っているフェルメールファンの聖地であるマウリッツハイス美術館から、リニューアルオープンプロモーションビデオにフェルメールオタク代表として出演オファーが来ました。というわけで、私のオタク人生は、虫好きから始まって、顕微鏡オタクになり、生物学者になり、動的平衡を知り、フェルメールオタクになり、偽物を作りましたが、最後は、本家本元にお墨付きを得たということで、何か一つ好きなことがあって、その好きなことを、ずっと好きであり続けると、それなりに豊かな人生が歩めるんじゃないかと、そういうお話でした。



松本清張没後30年記念
国立台湾文学館・北九州市立松本清張記念館 共同企画展示

多数のご来場ありがとうございました

遺された指紋——松本清張と台湾ミステリー小説

2022年7月29日(金)～10月23日(日)、北九州市立松本清張記念館において企画展「遺された指紋——松本清張と台湾ミステリー小説」が開催されました。国立台湾文学館(台湾・台南市)と台北駐日経済文化代表処台湾文化センター(東京都港区虎ノ門)の三か所で同時開催したもので、当館では初の試みでした。

開会式には台北駐福岡経済文化弁事処長・陳銘俊氏はじめ、北九州市長などが出席し、華やかにテープカットが行われました。



テープカットの様子



陳銘俊 処長



北橋健治 市長



台湾で起こった松本清張ブームについて、熱心に観覧する来賓の方々



また今回、初の試みとして、VR展示を公開しました。360°カメラで撮影した展示会場内を、Web上で自由に歩き回れる(ウォークスルー)技術により、企画展の全体構成や一部展示パネル等をご紹介します。

VR展示は12月で終了しますが、360°カメラの映像を当館ホームページで公開しますので、ぜひご覧ください。



展示品紹介

「両像 森鷗外」原稿



注1『北九州市史 五市合併以後（一九八三年）』
『北九州市史 近代・現代（教育・文化）』（一九八六年）参照
注2『両像森鷗外』の「作品紹介」を64号表紙に掲載しています。

二〇二二年は、森鷗外の没後一〇〇年であり、松本清張の没後三十年であった。北九州市では鷗外の離倉（小倉を離れて）二〇〇年というの付いて大いに盛り上がった。これには奇異な感じを抱く方もおられるだろう。鷗外の「離倉」着倉「まで数える市民性はどこから来るのだろうか」と。実のところ、松本清張もそのような市民の一人だったと言える。芥川賞受賞作「或る小倉日記」伝は、まさに鷗外の小倉赴任によって生まれた小説だ。鷗外は約二十年十ヶ月の滞在であったが、北九州を大いに啓蒙した（注1）。離任に際しては盛大な送別会が行われ、

その日（三月二十一日）を記念して官民の有識者による「廿一会」が結成されている。これが小倉における文化団体の端緒となったとされている。「或る小倉日記」伝の主人公や周辺人物のモデルになった人々も、このような鷗外の遺産を継承した地元の文化人であった。

清張は最晩年にも鷗外を題材にした作品を書いた。『両像 森鷗外』注2である。原稿では「二人の警官傳」となっている。冒頭の鷗外の祖父・白仙の墓跡を訪ねる場面から推察するに、藩医白仙と軍医鷗外、二人の医官について書く予定だったのだろう。雑誌掲載では「二警官傳」と改題、松本清張短篇小説館の一作としてスタートしたが長くなり、加筆して評伝「両像 森鷗外」となった。単行本の編集作業中に亡くなったことが編集部註として添えられている。

当館では「或る小倉日記」伝と「二人の警官傳」の原稿が同じケースに展示されている。『鷗外に始まり鷗外に終わった』とも言われる清張の初期と晩年の直筆原稿を、ぜひ見比べていただきたい。

（学芸員 柳原暁子）

友の会 活動報告

● 前進座 朗読劇「白い闇」

令和4年10月15日（土） 参加者80名
会場：松本清張記念館 屋外特設スタンド

今回の劇団前進座による朗読劇は、前年と同じく、秋の開催となりました。19回目となる今回は、清張さんの取材旅行を色濃く反映させた、「白い闇」上演いたしました。今回は観客席の間隔をとったため、入場を会員とその同伴者の方のみに限定し、参加者は80名でした。

「白い闇」は、トラベル・ミステリー・秀作で、清張さんが十和田湖をはじめ東北各地の名所を旅して、その時出会った新婚の夫婦に着想を得て、書かれた物語です。

10月15日は、秋風も心地よく、開演とともに黄昏で、徐々に高く積まれた小倉城の石垣に幻想的な照明が浮かび上がりました。まさに、みちのくを旅しているような雰囲気醸し出されていました。



● 清張サロン 第1回清張サロン（特別講演会）

第1回 令和4年10月1日（土） 14時～15時30分 参加者10名

- 講師：柳原 暁子（松本清張記念館学芸員）
- テーマ：国立台湾文学館・北九州市立松本清張記念館 共同企画展示「遺された指紋—松本清張と台湾ミステリー小説」
- 会場：松本清張記念館 会議室

令和4年度企画展 国立台湾文学館・北九州市立松本清張記念館共同企画展示「遺された指紋—松本清張と台湾ミステリー小説」についての解説を、担当の柳原暁子学芸員が行いました。

今回の国立台湾文学館との共同企画に至った経緯から、台北帝国大学教授で小説家の林熊生と金関丈夫と松本清張との交流について、また、吉田修一氏の作品の紹介など、興味深い話をさせていただきました。

その後、講師と一緒に企画展会場を見学しました。来場者の皆さんは、改めて、違う視点からも見る事ができたのではないかと思います。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申込は、松本清張記念館友の会事務局まで
TEL.093-582-2761

● 松本清張没後30年関連企画 2022 ●

新聞・雑誌・テレビなどで見られた主な松本清張の関連企画をご紹介します。(松本清張記念館主催事業は除く)

2月 2日	新聞	「歩く 聞く 考える」松本清張没後30年 民の怨念 テーマ今に通じる 文芸評論家・元担当編集者 郷原宏さん掲載 中国新聞
3月25日	テレビ	「わがこころの松本清張 没後30年 今なお人気の秘密とは?」放送 NHK北九州放送局*
3月26日、27日	テレビ	「混声の森」前・後編放送 NHKBS4K
5月16日	ラジオ	「ラジオ深夜便 ラジオ文芸館 白梅の香」放送 NHKFM
6月 1日	雑誌	「清張没後三十年特別企画」掲載 「オール讀物」令和4年6月号
6月19日~7月17日	テレビ	「眼の壁」全5回放送 WOWOW
6月23日~8月7日	催事	「ブックフェア 没後30年 再発見! 松本清張」開催 紀伊國屋書店*
7月20日	図書	「松本清張推理評論集 1957-1988」刊行 中央公論新社
7月23日	新聞	「西県細見 九州に息づく清張作品 没後30年」掲載 読売新聞(九州・山口・沖縄版)*
7月26日、8月2日	テレビ	「先人たちの底力 知恵泉 松本清張」前・後編放送 NHKEテレ*
8月 1日	図書	「文豪ナビ 松本清張」刊行 新潮社*
8月 1日	図書	「なぜ「星図」が開いていたか」刊行 新潮社
8月 4日	催事	「第6回足立山麓の松本清張さんを「しのぶ会」」開催 清張さんの道を歩く会*
8月 4日	テレビ	「松本清張 没後30年 元担当編集者が語る素顔」放送 NHK北九州放送局*
8月 5日	テレビ	「新日本風土記 松本清張 出会いの旅路」放送 NHKBSプレミアムほか*
8月25日~	新聞	酒井信「没後30年 松本清張はよみがえる」連載中 西日本新聞
8月27日、9月27日	雑誌	南陀楼綾繁「松本清張没後30年 45冊! 新潮文庫の松本清張を全部読む」短編小説編、長編小説編掲載 「波」2022年8月号、9月号
9月 1日~10月10日	催事	「砂の器・松本清張記念展」開催 亀嵩観光文化協会
9月 5日	新聞	「没後30年「持続可能」な松本清張作品 塩田武士さん(作家)」掲載 東京新聞
10月 2日	動画	「KITA9PR部のキタナビ! 没後30年 松本清張」放送 YouTube*
10月30日	雑誌	高橋敏夫「日々の疑いから始まる終わりのなき試みへ——松本清張没後三〇年に寄せて」『治安維持法と現代』44
11月 8日	図書	「任務 松本清張未刊行短篇集」刊行 中央公論新社
12月13日~15日	新聞	「清張と糸魚川 没後30年作家の足跡」上・中・下掲載 新潟日報*
12月25日	図書	「歴史をうがつ眼」刊行 中央公論新社
12月29日、30日	テレビ	「NHKスペシャル シリーズ未解決事件 File.09 松本清張と帝銀事件」第一部、第二部放送 NHK*

ほか、各放送局で松本清張原作テレビドラマを特集した再放送多数。 *は松本清張記念館協力

● 編集後記 ●

昨年は、松本清張没後30年にあたり、テレビや雑誌で取り上げられることも多く、また、松本清張に関する新刊本も出版されるなど、改めて松本清張の偉大さに気づかされた1年でした。今年は、北九州市制60周年、また、記念館開館25周年です。これを記念した事業も企画しています。今年も皆さまのご来館を心よりお待ちしております。



平和のまちスタディツアー

令和4年4月19日、勝山公園内に「北九州市平和のまちミュージアム」が開館しました。八幡大空襲の追体験ができる360度シアターや戦時中の市民の暮らしを体験できるコーナーなど、戦前から戦後の人々の暮らしを体験できる施設となっています。

同施設では、学校での平和学習の一環として、小学校6年生を対象に「平和のまちミュージアムスタディツアー」を企画。松本清張記念館も近隣の文化施設として連携し、これまでに、松本清張の母校である清水小学校を含め計5校(430人)の児童の皆さんが記念館を訪れました。

このスタディツアーは、松本清張に関するクイズの答えを探しながら、施設内を見学するコースになっています。児童からは「こんなにたくさんの本を書いたとは知らなかった」、「記念館の大きさに驚いた」などの声が聞かれ、北九州市を代表する文豪・松本清張のひとと作品を知っていたける機会につながりました。



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
http://www.seicho-mm.jp
制作 (株)ハーティブレーション

- 開館時間 午前9:30~午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌月)、年末年始(12/29~1/3)、館内整理日
- 観覧料 一般/600円(480円) 中高生/360円(280円) 小学生/240円(190円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR:小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分 小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館下車) 車:北九州市都市高速 大手町ランプより5分

